



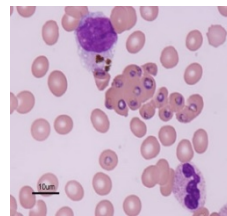
講座のアピールポイント

臨床検査部は一般の方々には比較的なじみが少ない部署かもしれませんが、日常の診療においては、各種検査の実施と管理、各科の医療者への情報提供、および感染管理等の仕事を行っています。このような性質を持った講座ですので、検査医学のスキルはもちろんのこと、それ以外に、様々な分野の専門医としてのスキルを持った医師が所属しています。そのため研究においても、様々な分野を融合した研究が特徴的です。一つの臓器に注目するのではなく、体全体に注目して、病院での診療に貢献する研究をめざしています。

講座研究紹介

マラリアの診断および治療に関する探索的研究 (AMED 熱帯病治療薬研究班)

昨今の海外旅行者や海外赴任者の増加に伴い、現地でマラリアに感染し、帰国後に症状がでて病院を受診するという患者さんが増えてきています。マラリアは発熱で始まるのが特徴ですので、マラリアの診断経験の少ない医師にとっては、風邪などの病気との区別が難しいのが現実です。またマラリアの検査を行うには熟練した技師の存在が必要ですが、このような技師はごく限られた専門施設にしか所属していません。この問題を解決するためには、だれでも簡単にマラリアの診断ができるようにする必要があります。私たちは、海外で使用されているマラリアの簡易診断キットに関して国内のデータを収集し、また、熟練した検査技師による検査結果との照合を行っています。これにより、保険診療でマラリア簡易診断キットが使えるようになり、ひいては一般のクリニックでもマラリアの診断が迅速にできることをめざしています。



イムノクロマト

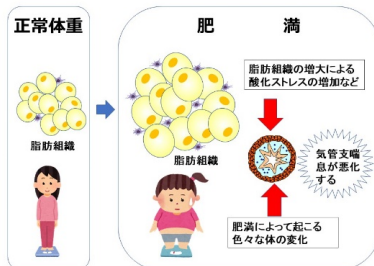


マラリアの治療に関する研究も行っています。重症マラリアの患者さんの中には、現在日本で認可されている薬のみでは、治癒が不可能な方がおられます。そのような方の命を救うために、熱帯病治療薬研究班では、海外から適切な治療薬を輸入しています。必要時は、患者さんの了解のもと臨床研究として薬を使っています。これによって、現在の患者さんの命を救うとともに、日本人に対する効果と安全性についてのデータを収集し、将来的には必要な薬が認可されることをめざしています。

重症気管支喘息の病態解明と治療薬の開発

気管支喘息は比較的良好にみられる病気で、100人のうち、約5人がかかっているといわれています。適切に薬をつかえば、ほとんどの喘息の方の症状がコントロールできます。しかし、その中の約5%の方は重症喘息で、適切な治療を行っても十分にコントロールできずに、仕事や学業に支障をきたしているのが現実です。そのような患者さんのお力になりたいと考え、喘息が重症になってしまう理由の研究と新しい治療薬の開発をめざしています。

また、喘息の患者さんは、喘息以外にも病気をもっていることがしばしばあります。合併している病気のために喘息がより悪くなったり、薬が効きにくくなったりすることがあります。私たちは、その中で、肥満症に注目して研究をすすめています。肥満を伴う喘息患者さんは喘息が重症化しやすいことが、世界的に知られています。私たちの講座では、日本人では欧米人に比べて、軽度の肥満でも喘息の悪化につながることを初めて証明しました（欧米人はBMIが30kg/m²以上で喘息発作の回数が増えるのに対し、日本人ではBMIが25 kg/m²以上で発作の回数が増える）。さらには、肥満になると脂肪組織由来と思われる酸化ストレスの増加で、発作の回数が増えることも示しました。現在は、さらなるメカニズムの解明と治療薬の開発をめざして研究をすすめております。



感染症診療 (HIV感染を含む) と渡航外来

マラリアなどの熱帯感染症の他、一般的な感染症診療も行っています。とくにHIV感染症は免疫が低下することで、体の様々な臓器に多彩な病態を引き起こします。当院の多くの診療科の協力を得ながら、合併症のある患者さんの治療にあたっています。また2015年以降、抗菌薬の効かない多剤耐性菌 (AMR) が国際的な社会問題として注目されています。当院で検出された薬剤耐性菌は他大学と協力して耐性遺伝子獲得の機序を解明し、それらの蔓延を防ぐ対策を院内外に広める努力をしています。

埼玉医療センター附属越谷クリニックでは、渡航外来 (トラベルクリニック) も兼務しています。渡航前のワクチン接種、渡航に関するアドバイス、予防薬の処方などを行います。渡航後の感染症診療と同じ医師が担当していますので、渡航前から帰国後まで、安心して渡航できるようにお手伝いさせていただきます。